

## 送る言葉

人としての真のやさしさ  
—北村靖道先生に—

Kitamura-sensei: A holder of the genuine tender emotions

安田 彰\*

YASUDA, Akira

「どうされました？」  
本学からの帰路、ご一緒していた北村先生が年配の女性に声をかけた。

南門のバス停に差し掛かった時である。

見ると痩せぎすのお婆さんが、停留所まえのレンガの垣根に腰を下ろしている。疲れ切ったという風情である。

「いや、バスを降りたものの、しんどくて今一休みしているところでね…」

「じゃ、家までお送りしましょう」

北村先生はそういって、おばあさんの腕をとり、よいしょと立上らせた。私もあわてて左腕を取って一緒に立上らせた。それからは二人で抱きかかえるようにして歩き始める。

「いや、家はすぐそこなのよ。でも歳をとると歩くのが何とも難儀でさ…」

先生はなぜか慣れた様子で、上手に歩調を合わせ、大通りの角を曲がり、よもやま話をしながら、ゆっくりと歩を運ぶ。

アパートはすぐ近くだった。でも部屋は2階で、鉄の外階段を昇らねばならず、これがなかなか難

\* 本学経営学部教授

儀であった。ようやく昇り切り、部屋の前までたどり着いた。

お婆さんは恐縮してお茶でもと言ってくれたが、先生は「ちょっと急ぎますので…。ご厚意だけで…」といって家を辞した。

もと来た道を辿りながら、私は先生の優しさと行動力を褒めそやした。

こうした親切は見知らぬ人にはできないもの、よくもそこまでできるもの、気づく力、声を掛ける勇氣、労をいとわぬ心、いずれをとっても自分にはできないと、褒めそやした。すると先生はこう言った。

「いや、今回が初めてじゃないんですよ。以前も連れて行ってあげてね…」

北村先生とはそういう人なのである。

困っている人、失意の人、元気のない人、誰かに相談を求めている人をすぐに見つける。そして声を掛ける。学生に限らない、同僚の先生方にもそうである。

ある先生が手を腫らしていると湿布薬を渡す、

研究室で学生と話をしていると御菓子を差し入れてくれる、最近こんな本が面白かったという書類を持ってきてくれる。なかなか就職先の見つからない学生がいると、心配して相談に乗ってくれる。決定するとお祝いの食事に誘ってくれる。こうした気配りと優しい対応は誰にでもできるものではない。そういうと先生は決まってこういう。

「だってCS（Customer Satisfaction）でしょう。民間企業でいえばお客様、学校でいえば学生と親御さんでしょう」

立場上、学生や同僚に対する配慮が多くなるのは当然として、よその人でも困っていれば分け隔てなく手を差し伸べる。大学の守衛さんや清掃の人はもとより、ムーバスの運転手さんにも欠かさず挨拶と感謝の声をかける。ここが前職・客室乗務員の心得なのかもしれない。しかし、現場を離れれば徐々に動きも気配りも薄くなろうというものの、でも彼の場合は違う。天性のものと言うしかない。

しかし、長くお付き合いしていて気付いた点がある。

男女分け隔てなく気配りや優しさを発揮する先生ではあるが、どうも女性に対しては気配りがさらに行き届いているように思われる。例えば、大勢の立食パーティーの場では男性より女性と一緒にいる方が多い（ような気がする）。歓談する様子はいつも以上に生き生きしている（ように見える）。食べ物や飲み物はと見ると、途切れることなくサービスする。40年間の「慣性」とはいえ、やはり異性優先なのか？

親しいのをいいことに、そんな印象をある時ズバリ言ってみた。

「先生はもちろん誰に対しても分け隔てなく気配りし、優しい対応をするけれど、見ているとどうも男よりは女性に対してより優しいような気がするんですが？」

すると先生は、じっと人の顔を見てこういった。「当たり前ですよ。母上という女性がいたからこそ先生も今こうして居られるのでしょう。女性に優しくしないで、いったい誰に優しくしろというんですか？」

なるほど、女性ばかりの客室乗務員を引き連れ、チーフ・パーサーをやった人だけあって、その女性観には芯が通っている。

ある人いわく「モテる男は腰が軽い。細やかな気づかいと軽やかな行動とが身についている」。

北村先生は艶福家であると聞いたが、実はそこに秘訣があったのか。

こんなエピソードばかり書いていると北村先生は大学運営にあまり関与していないように誤解されよう。事実は全く逆である。

学生委員をやれば、退学しようとする学生に会い、親身になって相談に乗ってやる。キャリア委員長をやれば就職率向上へ向け、キャリアセンターに詰めたりする。当面の課題である中期計画作成にあたって、学長に対し4年一貫の少人数教育の必要性を説き、教育に対する教員の情熱向上策を強調する熱血漢である。

さらに頭が下がるのは、人が厭う力仕事や裏方仕事を黙って引き受け、完璧にこなす点だ。おまけにそのことを誰に自慢もしなければ言いもしない。

今年度10月に、日本国際観光学会20回記念大会を本学で実施したのだが、裏方のロジスティクスはすべて北村先生がやって下さった。日程の決定（学長・副学長の予定把握と予約）と会場押さえはもとより、当日の受付から片付けまでの担務割と動線づくり、議事進行の段取りと内容チェック、講演者の題目決定と個別対応、さらにはグリーンハウスに対する懇親会のメニューコントロールに至るまで一手に引受けてくださった。

とりわけ驚いたのは、記念公演をお願いした落

語家の高座に敷く緋毛氈である。何とこれは奥様に作ってもらったのである。

かくして万事にきめ細かく行き届く北村先生、先生がいよいよ定年で退官される。同じく退官する小生は戌年の遅生まれで、半年も余計に禄を食ませてもらった。それに対し北村先生は亥年の早生まれ、お誕生日とほぼ一緒に定年となる。単なる偶然に過ぎないのだが、こんなところにまで控えめの気配りか(?)と、あらぬことまで感じ入っ

てしまう。

北村先生、スキップ通りでの談論風発の会もできなくなりますね。学生たちとの叱咤激励の集い(どちらを?)も終わってしまいます。寂しいことですが、お互いの住まいに近い千葉の浦安か船橋で、時おりは回顧と近況報告の会を開きましょうね。8年間の得難いご交誼に心から感謝いたします。どうかいつまでもお元気で!